

敦煌識字寫本研究

要旨

任占鵬

敦煌文獻中には数多くの識字に関連のある寫本が保存されており、それらの寫本から唐五代時代の識字教育に対するより具体的な調査研究を行うことができる。こうした研究の中で、先行研究では、寫本の収集、整理、校録が行われ、さらに識字類蒙書の定義、分類、内容、価値等領域で多大な成果が得られている。しかし、これまでには識字過程、方法及び識字寫本の學習過程を示す使用順序等についてはこれまで検討されてこなかった。本論では、こうしたことを焦点として研究を行い、當時の識字學習に關してより具体的な検討を行う。

本論では以下のような章立てでこの問題について検討を行った。

第一章は『上大夫』である。『上大夫』は習字する時に最初に使われる蒙書と見られる。全文の内容は「上大夫、丘乙己、七十士、尔小生、八九子」とごく短いものであり、儒家勸學の意義を持っている。様々な寫本の上や背面の餘白部分に、よく學郎が書いた『上大夫』が見られている。『上大夫』はあまりにも短くて、單一を避けるため、師範は學郎に『上大夫』、『牛羊千口』、數字等を結びつけて練習させ、學郎の勉強に対する興味を高めるようになってきた。ある寫本は「七十二、女小生」と書かれてあり、ある寫本は「七十士、尔小生」と書かれている。後者の方が『上大夫』の原容に近いと考えている。南宋から『上大人』が出現し、最後には「佳作仁、可知礼也」となっている。

第二章は『上士由山水』である。文體は14句の五言詩から成る。『上大夫』の後に習字詩歌として使われた文獻である。歴史人物の物語で、學童の勉強の熱心さを励ますためのものであろう。王生の賢徳、顔回の徳行、王充の學問を學んで、王澄の傲慢、丁公の不忠を學んではいけない、という。勸學、徳行教育の意義が含まれていると見ることができる。

第三章は『千字文』である。最初の作者は鐘繇である。王羲之が書寫したことがあり、周興嗣が次韻したとされる。有名な習字手本教材であり、勸學の意味も含まれている。各學習段階の學郎によってよく使われていただろう。初學者の場合、冒頭の内容から書き始め、師範が模範字を書き、その後學郎が模寫し、1字を1行から3行に練習したものもある。習字能力が前より高くなったら、自分で習字の手本を見て習字を続け、書道能力をさらに進歩させてきた。

第四章は『正月孟春猶寒』である。十二カ月を綱目として、それぞれの節気や気温を並べるもので、敦煌書儀の時令文と似ている。張敖の『新集吉凶書儀』から出された可能性があり、簡単な書儀とも言えるものである。また、3つの寫本は『正月孟春猶寒』と『雜抄』の「四時八節」「論三川、八水、五岳、四瀆」等と連続して書かれ、組み合わせた内容として學習されたという。『正月孟春猶寒』は學郎に識字、時令と手紙書くための學習教材として使用されていたものと考えられる。

第五章は『敦煌姓氏雜録』である。全ての寫本は合計152の姓が残り、多くは敦煌地區の漢民族と胡族の大姓、學郎が姓名を學ぶ際の重要な蒙書と見なすことができる。編纂時

代は張議潮がチベット統治を覆して歸義軍を立てた後と推測される。敦煌文献により、學郎は『敦煌姓氏雜錄』と姓名、社司轉帖、官職、僧官等を結び付けて學習する方法がある。

第六章は『開蒙要訓』である。敦煌寫本『開蒙要訓』の数は『千字文』に次ぐ多さである。敦煌の學郎はそれを識字と習字の教材として勉強して行政文書、手紙、記帳等の基礎能力を身につけていった。學郎の1人が読み上げ、もう1人が筆寫するという方法がとられたと見られる寫本があり、吏として口述筆記を行う訓練を行った資料と考えられるのである。

學郎は最初に『上大夫』を使い、その後『上士由山水』を使用しただろう。習字の基本を把握してから、『千字文』で習字能力と書道能力をさらに向上させる。習字する際、學郎が日常生活や今後の仕事に使う文字に対する學習も行う。『正月孟春猶寒』、『敦煌姓氏雜錄』、『開蒙要訓』で時令、姓名、社司轉帖、行政文書、記帳、手紙を書くための基礎的な知識とそれに関わる文字を學習する。